

関連性理論からみた「かもしれない」「かも」について

—話し手の前提と関わる副詞との共起に注目して—

許 允瑄 (筑波大学大学院 博士後期課程)

要 旨

本研究では、「可能性判断」を表す形式である「かもしれない」とその短縮形とされる「かも」を研究対象とし、BCCWJを利用し、副詞との共起関係を調査した。そこから、話し手の前提と関わる「やはり」系と「意外」系の副詞と共起された場合に注目し、関連性理論の観点から考察を行った。その結果、「やはり」系と共起された「かもしれない」は、「やはり」に後続する当該事態がその前提と合致することから、既知の想定は変わらず、②既知の想定が強化の認知効果が期待されるのに対して、「意外」系は、反対の事態を前提とするため、③既知の想定を削除、または①もともとあった想定に文脈含意が加えられる認知効果が期待されることが明らかになった。

キーワード：演述型、情意表出型、関連性理論、認知効果、コーパス

1.はじめに

「かもしれない」は、話し手の心的態度を表す文末モダリティ形式の中で、可能性の認識を表す形式とされ、一つの可能性として文を述べていることを表す「もしかすると、もしかしたら、もしかして、ひょっとすると、ひょっとしたら、ひょっとして」といった副詞と非常によく共起する。また、ある事柄が選択肢の一つであることを表す「あるいは」とも自然に共起する(日本語記述文法研究会(2003))

(1) もしかすると、犯人はまだ近くにいるかもしれない。

(2) あるいは、そういうこともあるかもしれない。(日本語文法記述研究会(2003))

しかし、先行する文のタイプによって、(1)と(2)のような演述型⁽¹⁾の文ではごく自然に共起する副詞が以下の例文(3)のような情意表出型の文では不自然に感じる。

(3) ?? (新発売の青汁を飲んで) もしかしたらおいしいかも!

それに対し、例(4)と(5)のような情意表出型の文では、話し手の発話以前に持っていた想定と一致したことを表す「やっぱ」や、話し手の期待や予想が外れたことを表す副詞「意外に」などの副詞とは問題なく共起される。

(4) ヌーディー派の私が...最近ハマった赤。やっぱいいかも～ (ブログ)

(5) (にらめっこしてより長く耐えた人が勝つゲームの最中)

私でも意外に大丈夫かも。(テレビ)

情意表出型の文で「かもしれない」と共起された「やっぱ」や「意外に」という副詞は、国立国語研究所(1991)の分類では、背景的知識の共有を前提とする副詞の類に属する。

このようにモダリティ副詞と「かもしれない」は制限なく共起することができるが、特に「やは

り」系と「意外」系の副詞は、当該事態に対し、話し手の予想や予期を表す(工藤 2000)もので何を前提にしているのかが深く関わるものであるため、文のタイプによって前提とされるものが異なってくると考えられる。しかし、これらの形式が一緒に共起されることでどのように解釈されるのかはまだ明らかにされていない。

そこで、本研究では「かもしれない」とその短縮形の「かも」が共起される副詞を BCCWJ 現代日本語書き言葉均等コーパスで共起頻度を調べ、それらの文がどのように解釈されていくのかを、関連性理論から認識レベルで明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

「かもしれない」は、認識のモダリティ⁽²⁾の中で、主に「可能性判断」を表す形式として扱われてきた。三宅(1992)は、「可能性判断」を命題が真である可能性があるとして認識することであると定義し、「可能性判断」は単に可能性があることを認識するにすぎないため、命題の真偽は不確実なものであるとした。命題の不確実性⁽³⁾を表すという点から考えると、いわゆる推量や実証的判断、確信的判断と同じ性質を共有しているとも考えられるが、三宅は「可能性判断」は「一つの可能性として真である」を表すことに対し、推量や実証的判断、確信的判断は「総ての可能性として真である」を表すことから認識の仕方が異なることを指摘している。このように「かもしれない」は「一つの可能性として真である」ことを表すことから、以下の(6)のように矛盾する命題を並列させることが可能である。しかし、推量を表す「だろう」は矛盾する命題を並列させることができない。

(6) 泊るかもしれないし、泊らないかもしれない。どっちにしても相当おそくなる。

(7) *泊るだろうし、泊らないだろう。どっちにしても相当おそくなる。(三宅 1992)

しかし、以下の例文(8)は、例文(6)のように矛盾する命題を並列させることができない。

(8) (新発売の青汁を試飲して) あ! 意外とおいしいかも。

(8') (新発売の青汁を試飲して) あ! 意外とおいしいかも。*おいしくないかも。

(ワンプラディット 2008)

このような「かもしれない」の用法についてワンプラディット(2008)は、「おいしい」という感覚は話し手の直接的な経験において決まることであることから、このように使用された「かもしれない」は可能性を無くし、ヘッジとして機能するとした。

また、小野・山岡・牧原(2009)は、Sperber and Wilson(1995)の関連性理論(Relevance Theory)の概念の一つである高次表意という手法から「かもしれない」を考察しており、以下の例文(9)から読み取れる「かもしれない」の談話機能は、可能性を伝えることではなく、可能性を前提として心的態度を表すとしている。

(9) (略) そうかもしれないねえ。しかし、私の見かたは、ちょっと違って、(略)

(小野他 2009)

ここまで先行研究を概観してみると、まず、情意表出型文に見られた「かもしれない」、「かも」は意味論の研究では解明できないことと、これまでの語用論的研究では主に発話者の発話意図について研究されてきていることが問題点として考えられる。

そこで、本稿では、S&W(1986)の関連性理論(Relevance Theory)を援用し、主観的述語と共起された「かも」が解釈される過程と、その過程を支配している原理を明らかにすることを目的とする。

3. 関連性理論

ここでは、本稿の理論の枠組みとして援用する関連性理論を概観する。語用論の目的は、発話が解釈される過程と、その過程を支配している原理を明らかにすることである（今井 2001）。関連性理論は Grice(1975)の協調の原理における関連性理論(maxim of relation)を発展させたものである。関連性理論は以下の2つに定義される。

関連性の原理Ⅰ 認知の原理 (Cognitive Principle of Relevance)

人間の認知は関連性を最大にするように働く性質を持つ

関連性の原理Ⅱ 伝達の原理 (Communicative Principle of Relevance)

全ての顕示的伝達行為は、それ自体が最適な関連性を持つことを当然視している。

(今井 2001)

関連性の原理Ⅰは人間の認知の傾向を表す。人間は頭の中にある様々な想定（記憶や一般知識など）を持っており、常に新たな想定に改善されていくことを願い、認知環境を改善していく。ある人の頭の中にある想定を認知環境と呼び、認知環境を改善する作用を認知効果と呼ぶ。何か新情報が入力された場合、①もともとあった想定に文脈含意が加えられる、②既知の想定の強化、③既知の想定の削除、の3つの影響がある際に認知効果があると見なす。つまり、関連性理論では、聞き手の認知環境に変化を生じさせることを目的として発せられ、かつその目的を達成する発話を指して関連性(relevance)を持つと定義する(今井 1995)。

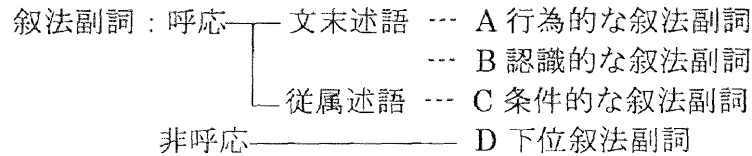
関連性理論Ⅱは、ひとが、あることを相手に伝える意図があり、かつ、その意図があることが自分・相手にとって相互に明白にすることを意図している場合の伝達行為を指して顕示的伝達と呼び、顕示的伝達をするとき、最適な関連性を見込みを伝達するものであると定義している。

以上のように、関連性理論はことばが単に同じ記号を使うから通じるのではなく、話し手が関連性を保障してくれることで、聞き手が解釈しようとするから通じるという考え方である。

4. 「かもしれない」と副詞との関係

副詞は、単語を文法的に分類した品詞の一種に数えられるもので、それ自身語形変化(活用)をせず、もっぱら用言またはそれ相当の語句を修飾(限定・強化)することを基本的な機能という(工藤(2000: 164))。副詞は通常、動作や変化のしかた(様態)、あるいは出来事の付随的なありかた(状態)を表す状態副詞と状態性の意味を持つ語にかかって、その程度を限定する程度副詞、否定・推量・仮定など、述語の陳述的な意味を、補足したり明確化したりする陳述副詞(叙述副詞・呼応副詞とも呼ばれる)の三つに下位分類される。中でも陳述副詞は一定の陳述の意味をになう形式と呼応して用いられることから文末形式とも深いかわりを持つとされる。

そこで、工藤(2000)は文のモダリティ＝叙法性の表現手段として、述語と副詞とがどのように役割を分担し、文を組み立てに協力しているのかについて述べている。工藤(2000)は陳述副詞をまず叙法副詞、評価副詞、とりたて副詞の3つに大きく分け、さらに叙法副詞を以下のように下位分類を行っている。



(工藤 2000 の分類を整理)

工藤(2000)によると、ABC はいわゆる呼応現象をもつものであり、D は用いられる文の陳述的なタイプがほぼ叙述文に限られるという叙法的な共起制限はあるが、積極的に一定の述語形式と呼応する現象が見られないものであるとしている。

そこで、本研究では工藤(2000)の分類を参考に BCCWJ を利用し、「かもしれない」と叙法副詞の共起関係を調べた。その結果を以下の表 1 に示す。

〈表 1〉「かもしれない」「かも」と共起された副詞 (工藤(2000)の分類に基づく)

	「かもしれない」「かも」	
B 認識的	確信	きっと
	推測	多分・おそらく・もしや
	不確定	あるいは・もしかすれば・ひょっとしたら
C 条件的	譲歩	もちろん・たしかに
D 下位	予想・予定	やはり・案外(に)・意外にも

表 1 の結果から A 行為的な叙法の副詞の類は見られなかったが、A は、話し手または動作主の願望や意志(情意)に基づく行為に関するもので、具体的には依頼(どうぞ・どうか・なにとぞ・なにぶん)、勧誘・申し出 etc.(さあ・まあ・なんなら)、願望・当時 etc.(ぜひ・いっそ・できれば)が代表例である。それに対して、B 認識的な叙法の副詞は従来の研究で呼応関係にあるとされている不確定(あるいは・もしかすれば)の類のもの以外にも推測(多分・おそらく)、確信(きっと)、比況(まるで)の類の副詞とも共起が見られた。

そこで、本研究ではこれまで論じられたことのなかった話し手の前提と関わる副詞との共起関係に注目して、関連性理論の原理を援用し考察を行うことで、認識の面から「かもしれない」の働きを明らかにする。

5.分析

5.1 データ

本研究では、2009 年から収集したテレビ番組とブログからのデータと BCCWJ 現代日本語書き言葉均等コーパスで、「かもしれない」と「かも」を抽出した(「かもしれない」19490 用例、「かも」6718 用例)ものをデータとした。そこで、BCCWJ から抽出したデータをもとに副詞との共起関係を調べたが、その結果、全体的に副詞との共起が見られたのが「かもしれない」は 2128 用例で、「かも」は 768 用例見られた。その中で、「意外に・意外と・案外・案外に」(以下、意外系)と共起された「かもしれない」は 67 用例、「かも」は 59 用例見られた。また、「やはり・やっぱ・やっぱし・やっぱり」(以下、やはり系)と共起された「かもしれない」は 98 用例、「かも」は 25 用例見られた。

5.2 「やはり」系

「やはり」系の副詞は、複数の前提を持っているとされており、赤羽根(1986)は「やはり」と「案の定」を確定した叙述事態に対する話し手の認定を表す類の中で、話し手自身における実現される事態について予想を前提とするものと説明している。また、呉(2003)は「やはり」系に関係する前提について「社会的通念・常識」「話者個人の考え」「客観的事態」の3つにまとめ、「やはり」に後続する当該事態がその前提と合致することを表しているとしている。本研究では呉(2003)の3つの前提の分類を参考に、演述型と情意表出型で見られる「かもしれない」と「かも」を分析する。

(10) 顔はかゆくないが、かゆい。それは花粉の症状ですね。という話だった。いや私には花粉の症状は今までなかったというが、やはり加齢で体質が変わったのかもしれない。

(BCCWJ yahoo ブログ)

例(10)は、演述型に見られる「やはり」系と「かもしれない」の共起であり、「年齢を重ねていくと体質が変わっていく」という「社会的通念・常識」を前提にし、その「社会的通念・常識」が花粉の症状の可能性の一つとして考えられることを表している。

(11) 4分の3はオリンピックの可能性はある。でもやはり4分の1は負けるかもしれない。

(BCCWJ スポーツ雑誌)

例(11)も演述型の文であるが、「オリンピックの開催予知の可能性」に対する客観的な判断であり、話者の主観が関与されていないことから「客観的事態」が前提とされていることを表している。

以下は情意表出文に見られる例である。

(12) 相手から見られてる顔の状態で、自分の顔が見える鏡の商品名教えて下さい。何年か前に話題になった商品ですが、今ごろになって「やっぱり欲しいかも。。。」と思うようになりました。

(BCCWJ yahoo 知恵袋)

(13) でも、劇場を出たあと一番感じたのが「三国志が読みたい」と思った事。そういうことで最も好きな「横山光輝版の三国志」を読んでいます。CGも素晴らしいですがペンで描かれた線には何とも言えぬ味わいがあります。やっぱりこれが一番面白いかも w

(BCCWJ yahoo ブログ)

(12)(13)はそれぞれ、以前から気になっていた商品が何年か過ぎた今でも「ほしい」という話者の願望や、三国志の色々な版をこれまで見てきた中で、「これが一番面白い」という話者の評価が前提されている。つまり、これらの文は個人レベルの情報であるため、「話者個人の考え」が前提されていると考えられる。

ここまでまとめると、「かもしれない」の演述型の場合は「社会的通念・常識」、「客観的事態」が前提され、一つの可能性として述べられており、情意表出型の場合は「話者個人の考え」が前提され、話者の考えがその前提と合致していることを表している。

5.3 「意外」系

「意外」系の副詞は赤羽根(1986)に分類によると、叙述事態に対する話し手の評価を表す類の中で、叙述事態と反対の事態を一般化して前提とするもの、つまり、意外性の評価であるとしている。「普通はAだ…意外にも」の形として表れるとしている。

まず、(14)と(15)は演述型の文である。

(14) 俺はふとひらめいた。と、すると、そのような観点から考えてみた場合、宗教というの
も、意外にそれほど悪い存在でないのかもしれない。(BCCWJ 出版・小説)

(15) 冬時間になったので、月に一度くらいしか日曜のイベントは行われなようです。でも、
夏の時と同じくらいの参加人数でした。意外に、人気があるのかも。

(BCCWJ yahoo ブログ)

(14)は「宗教はあまりいい存在ではない」という話者個人の考えが前提され、ある本を読んでそう
でない可能性があるもあると思ったこととし、(15)は「イベントはそれほど人気がない」という話者
個人の考えがそうでないかもしれないという可能性を表している。

以下は情意表出型の例である。

(16) 最初のピーリングは耐えられる程度の痛み。「意外に平気かも～」と余裕をかましていた
ら、不意打ちの激痛！(BCCWJ 出版・雑誌)

(17) そんなこんなで、世界中の人からご連絡をもらえるようになりました。意外に楽しいか
も？(BCCWJ yahoo ブログ)

以上のことから、「意外」系と共起された「かもしれない」は主に「話者個人の考え」があることを
機会にその前提が「そうでない可能性がある」と変化していることを表していると考えられる。ま
た、「かもしれない」は様々な可能性の中での1つであることを表す表現であるため、「意外」系の
副詞と共起された「かもしれない」は可能性を表すことより、前提と相違することを述べることに
焦点があてられると考えられる。

5.4 まとめ

「意外」系の副詞は赤羽根(1986)に分類によると、叙述事態に対する話し手の評価を表す類の中で、
ここまでの分析の結果を以下の表2にまとめた。「やはり」系と共起された「かもしれない」「かも」
の演述型は「社会的通念・常識、客観的事態」を前提としているのに対し、その他は「個人
の考え」のみを前提としている結果となった。

〈表2〉分析の結果

	やはり	意外に
演述型	社会的通念・常識、客観的事態	個人の考え
情意表出型	個人の考え	個人の考え

6. 考察

最後に、関連性理論の中で、関連性理論の原理Ⅰの認知の原理から認知効果との関わり（①も
ともとあった想定に文脈含意が加えられる、②既知の想定強化、③既知の想定削除）につい
て「やはり」系と「意外」系のそれぞれに共起された「かもしれない」「かも」について考察を行うこと
とする。まず、「やはり」系と共起された「かもしれない」は、「やはり」に後続する当該事態がその
前提と合致することから、既知の想定は変わらず、②既知の想定強化の認知効果が期待される。
それに対して、「意外」系と共起された「かもしれない」は、反対の事態を前提とするため、②既知

の想定が強化の認知効果は期待できず、③既知の想定を削除、または①もともとあった想定に文脈含意が加えられる認知効果が期待されると考えられる。

注

- (1)益岡(1997)は、人物の内的世界の事態を表すものとしては、その事態を直接に表出する情意表出型と、知識・情報として表現伝達する演述型の文に区別できるとしている。
- (2)認知的モダリティとは、命題の真偽に関する話し手の認識を表す意味成分である(三宅(1992))。
- (3)不確実性とは、述べられる命題内容が話し手にとって確定的な情報でありながらも事実とは判断されていないことである(森山(1989))。
- (4)リーチ(1983)のポライトネスの原理の6つの原理の一つであり、その他、「気配りの原理(Tact Maxim)」「寛大性の原理(Generosity Maxim)」「謙遜の原理(Modesty Maxim)」「一致の原理(Maxim of Agreement)」「共感の原理(Sympathy Maxim)」がある。

参考文献

- 赤羽根義章 (1986) 「注釈的成分」の位置づけと下位分類 『国文学 言語と文芸』 100
- 新井恭子 (2006) 「関連性理論における「広告のこぼれ」の分析」 『東洋大学経営論集』 第68号
- 今井邦彦 (1995) 「関連性理論の中心概念」 『言語』 4号
- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』 大修館書店
- 呉珠熙 (2003) 「前提を持つモダリティ副詞の研究」 筑波大学大学院 博士学位論文
- 小野正樹・山岡政紀・牧原功 (2009) 「「かもしれない」の談話機能について」 『漢日理論言語学研究』 北京：学苑出版社
- 工藤浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」 『日本語の文法3 モダリティ』 岩波書店
- 国立国語研究所 (1991) 『日本語教育指導参考書19 助詞の意味と用法』 大蔵省印刷局
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』 第1巻 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』 くろしお出版
- 益岡陸志 (1997) 「表現の主観性」 田窪行則(編) 『視点と言語行動』 くろしお出版
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現』 明治書院
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書4 モダリティ』 くろしお出版
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell, Oxford (内田聖二他訳 『関連性理論—伝達と認知—』 第2版 研究社)

用例出典

- 「グータンヌーボ」 09年6月3日
- 「王様のブランチ」 09年7月4日
- 「おしゃれイズム」 08年11月2日

(許允瑄、筑波大学大学院博士後期課程、cosilver@hotmail.com)